



Title	教材としてのガラススライド : 京都高等工芸学校初期における海外デザインの受容
Author(s)	和田, 積希
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75346
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

教材としてのガラススライド

—京都高等工芸学校初期における海外デザインの受容

和田 積希 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、約 1,900 枚のガラススライド（幻燈種板）が収蔵されている。これらは、同大学の前身校のひとつ、京都高等工芸学校において、1902 年（明治 35）の開校時から 1920 年代にかけて、教材として収集されたものであり、多くがヨーロッパ製である。このなかで、主に海外デザインの参考資料と考えられるのは、1902 年に初代校長の中澤岩太（1858–1943）から納入されたドイツのフランツ・シュテットナー（1870–1946）の研究所が作成したガラススライド 100 枚（AN.0690）、同研究所製で、1911 年に追加購入された 622 枚（AN.2171）、1912 年に追加購入された 309 枚（AN.2179）、そして 1914 年（大正 3）に購入されたガラススライド 208 枚（AN.2239）の 4 件である。同研究所製のガラススライドは以前から研究対象としているが、このうち、やはり重要だと考えられる 1902 年に校長自ら納入したガラススライド 100 枚と今回初めて対象とする 1914 年購入のガラススライド 208 枚を分析する。

1. 1902 年購入のガラススライド

各被写体を分析すると、製作地別では、40 枚と圧倒的にドイツの作品が多く、ついでイタリア 22 枚、フランス 18 枚、オランダ 5 枚と西ヨーロッパのもので、ほぼ占められている。時代別では、明確な区分は難しいが、古代 8 枚、中世 17 枚、ルネサンス期 14 枚、近世 21 枚に対して、同時代のデザイナーや建築家による作品が 24 枚と多い。ドイツはこのなかでも 16 枚ともっとも多く、最

多はオットー・エックマン（1865–1902）の作品 6 枚である。このほか、アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド（1863–1957）やヴィクトール・オルタ（1861–1947）、シャルル・プリュメ（1861–1928）などの作品が含まれており、ヨーロッパの最新のデザインを参考にしようとしていたことが分かる。ジャンル別では、建築物の装飾部分、壁画などを写したものが 33 枚と圧倒的に多く、室内全体の装飾が 5 枚、家具が 7 枚、照明器具が 5 枚、陶磁器が 12 枚、染織品が 10 枚などとなっている。全体的に見ると、国や時代、ジャンルとバランスよく選ばれているが、建築物や室内の装飾、家具、工芸品のデザインに着目して選ばれていること、中澤が開校当初とくにドイツの新しいデザインに関心を寄せていたことが分かる。

2. 1914 年購入のガラススライド

被写体の選択は、当時の図案科の教授で建築家の武田五一（1872–1938）と本野精吾（1882–1944）が主導したと考えられる。武田は、1901 年から図案学研究のためヨーロッパに留学し、1903 年に開校から 1 年遅れて帰国した。そのため、開校時に図案科を主導したのは、中澤と洋画家の浅井忠（1856–1907）であった。しかし 1907 年に浅井が急死したことで、武田と本野の体制へ変わり、徐々に教育課程や教材にも変化がみられることとなった。

さて、各被写体を分析すると、製作地別でもっとも目立つのは、日本の作品 55 枚である。信貴山縁起絵巻などの古典絵巻が 17 枚と日本の建築

物が38枚である。絵巻はいずれも室内の場面である。建築物には、鹿苑寺金閣など京都の寺社のほか、名古屋城や東京大正博覧会の迎賓館などが含まれ、おもに室内の構造、家具や装飾が目されている。武田は、京都府技師として平等院鳳凰堂の修理などにもかかわっており、日本の古建築の記録を残し、見直す意図もあったと考えられる。

つぎに多いのが40枚のフランスである。ヴェルサイユ宮殿など宮殿建築が中心で、いずれも豪華な家具と壁面装飾に彩られた室内がメインになっている。つづくイタリアの作品33枚には、ポンペイの民家や古代ローマのカラカラ浴場のほか、メディチ家のリッカルディ宮殿などルネサンス期の建築が含まれている。つづく12枚のイギリスの作品には、ノール・ハウスなどのカントリーハウスが多く、やはり室内の様子がメインで、壁の装飾や家具が写っている。また、同時代の建築家のペイリー・スコット(1865-1945)やグラスゴー派のチャールズ・レニー・マッキントッシュ(1868-1928)の作品も含まれている。このほか、オーストリアのものとして、同時代の作家、ヨーゼフ・ホフマン(1870-1956)、コロマン・モーザー(1868-1918)、ヨーゼフ・マリア・オルプリヒ(1867-1908)による家具や室内装飾があり、ドイツのものとしては、レジデンス宮殿のほか、ペーター・ベーレンス(1868-1940)の作品なども含まれている。また、ベルギーのアンリ・ヴァン・ド・ヴェルドの室内装飾も2点ある。さらに、アメリカのボストン近郊のミザリーアイランドに建てられたバンガローの写真なども数枚含まれている。

このようにしてみると、日本の伝統的な建築物の見直しとともに、ヨーロッパのデザインを取り入れようとしたことは間違いなく、1902年購入のガラススライドに比べて、工芸品への注目度が下がり、室内装飾や家具が選択の中心となっている。さらに、各地域の建築、デザインの特徴をもっとも示す時期のものが選択されており、同時

代の資料としては、ウィーン・ゼツェッションやダルムシュタット芸術村、ドイツ工作連盟といったドイツ語圏のデザインが目されている。

最後に、被写体の入手方法であるが、大正期に入ると、カメラもある程度普及し、ガラススライドにもオリジナルな画像が利用できるようになっていた可能性が高い。実景や実物のほかに、印刷物や書籍に掲載されている写真を撮影することもあったと考えられる。実際、絵はがきを撮影したとみられるものがあり、これには「本野」のハンコが押されていた。ガラススライドの選択に本野が関与していることを示す証拠でもある。

3. 結論

1902年に中澤から納入された100枚と、1914年におそらく武田、本野主導で購入されたガラススライドは、古代から同時代までヨーロッパのデザインを学ぶための教材であり、前者は、中澤の関心からドイツや工芸に中心をおいたもの、後者は、武田あるいは本野の関心から建築や室内装飾に中心をおいたものであった。さらに、同時代の資料としては、ドイツ語圏のデザインを重視していた。

もちろん京都高等工芸学校における海外デザインを示す教材は、ガラススライドだけではない。同時代に製作された陶磁器や家具などの実物資料はもちろん、図書館では、海外製の図案集や図版入り書籍も多数収集され、海外デザインの受容がはかられていた。このなかで、書籍に対するガラススライドの利点は大勢で一度に見られることであり、多くの作品のなかから教員がより重要視し、情報共有したいものが選択されていたと考えられる。

ガラススライドは、複製資料であるがゆえに、保存・調査の対象になりにくい側面があるが、教材の重要な一端を担っており、京都高等工芸学校をはじめ、明治・大正期の高等教育機関の教育の実態をあきらかにする上でも重要な資料である。